

ソフトボール競技のゲーム分析

—攻撃におけるボールカウント別打率—

Game Analysis in a Softball: The Batting Average According to Count in an Attack

キーワード：ソフトボール、ゲーム分析、カウント別打

佐藤 理恵

I. 緒言

ソフトボールは球技の中では打撃・スローイング型に位置づけられ¹⁾、1チーム9人(指名打者を加えた場合は10人)ずつの2チームが攻撃側と守備側に分かれて攻防を繰り返し、規定の回数内で得点を競い合う。攻撃側では投球にバットを操作し、思いどおりに打ち返すことで走者の塁を進め、守備側では打球を捕球して打者や走者をアウトにすることで進塁を阻止するのである。

ゲーム展開は野球と共通するところが多いが、ソフトボール独自のルールや技術も少なくない。野球と違って競技場が狭く、投捕間・塁間が短いことから、投球が手から離れるまで離塁出来ないというルールもある。このような点から、ソフトボールの戦術には「塁間の距離」に起因するものとして、①セーフティーバントの成功率が高い、②相手野手の捕球ミスで次の塁を狙いやすい、などの特徴がある。また、「投球後離塁」に起因するものでは、①盗塁の成功率は低く、②内野手の思い切ったシフトが可能、③犠牲バントの成功率は低く、④叩きつける打法で進塁させやすい、⑤一死二塁より二死三塁の方が大きなチャンス(長打でなければ二塁から本塁への生還が困難)、などが挙げられる²⁾。したがって、得点するには、様々な戦術とそれを実行する選手の技術が要求され、ゲーム終了時点の得点数で勝敗を決するため、「得点出来るチーム」また、「得点を与えないチーム」が

強いチームであるといえる。

野球においては以前より、「野球統計学」や「セイバーメトリクス」など、そのプレーが得点に、ひいてはチームの勝利にどのように結びついたのかを数値で表わす様々な指標が存在する³⁾。野球と同様にソフトボールも、試合中のあらゆる局面のデータを収集し、相手に勝つための戦略を練り、勝利へと繋げている。すなわち、ひとつの局面が終了し投手が投球準備動作を行うまでの間に、次のプレーを決定するための判断材料として対戦データをチームで共有することは必須である。

そこで本研究では、攻撃におけるボールカウント別の打率と打撃内容に着目し、打者有利なカウントや戦術上の問題点を明らかにし、今後のチーム指導の一助とすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象試合

平成23年度に東京女子体育大学が対戦した、東京都大学春季リーグ戦(以下春季リーグ戦)5試合と、東京都大学秋季リーグ戦(以下秋季リーグ戦)5試合を対象とした。春季リーグ戦と秋季リーグ戦では対戦大学が1チーム異なり、また秋季リーグ戦では本学を除く各大学が新チームとなったことから、春季リーグ戦と秋季リーグ戦を分けて分析することとした。

2. 分析項目

分析項目はスコアブックを基に、12通りのボールカウント別(0-0、1-0、0-1、1-1、2-0、0-2、2-1、1-2、3-0、3-1、2-2、3-2)の打撃内容(打席数・見逃し・トライ・打数・安打・打率)とした。ボールカウント【0-0】からの「打席」は、「見逃し」か「トライ」に分けられ、「トライ」は「打数」、「ファール・空振り」、「犠打・犠飛」に分けられる。「打数」は「安打」か「凡打」に分けられ(失策は凡打)、「見逃し」でのストライク、「トライ」での「ファール・空振り」の場合、次の【0-1】で再分析される。「見逃し」がボールであれば【1-0】で再分析される。1度の打席で2ストライク後のファールが1回あった場合、同カウント内での分析が2回となる。

分析した全打席数は、春季リーグ137回、秋季リーグ146回であった。なお、打率は野球・ソフトボールの慣例で「割分厘」で示されるが、単位は省略した。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 各リーグ戦の成績及びチーム打率と得点数

各リーグ戦の成績及びチーム打率とチーム得点数等を表1に示した。春季リーグ戦の対戦成績は4勝1敗で第2位であった。打率・得点の最も高かったのは、M大戦でチーム打率400、得点は12

点、最も低いのはN大戦で、同130、得点は0点であった。春季リーグ小計では、チーム打率311、平均得点は6.0点であった。秋季リーグ戦の対戦成績は3勝2敗の第3位であった。チーム打率の最も高かったのはK大戦で455、得点ではNJ大戦の9点であった。最も低いのはN大戦で、同100、得点は1点であった。秋季リーグ小計では、チーム打率270、平均得点は5.0点であった。春季・秋季合計では、チーム打率291、平均得点は5.5点であった。

試合で必ず得点することが、勝利するためには必須である。春季リーグ戦に比べ秋季リーグ戦の得点は少なかったが、どのチームからも得点出来ているという点では対戦チームへの対応は少なからず出来ていたといえる。さらに得点を増やすためには、試合の中での決定打を増やさなければならないが、どの投手からもコンスタントに打てる打撃力が必要である。1試合ごとの得点は、チーム打率1割台では2点未満、3割台で5点から9点、4割を超えると8点から12点であった。春季リーグ戦・秋季リーグ戦共に、対戦チームによって打率・得点に大きな差があり、特にW大戦とN大戦の打率が低く対戦投手への対応ができてないことが示された。チーム全体として打撃内容を改善していくことが重要であり、これらの対戦データと春季・秋季合算値から、すべての試合で3割程度のチーム打率と5点以上を奪える得点力が、勝つチーム作りの目標といえる。

表1 各リーグ戦の成績及びチーム打率と得点数等

リーグ	対戦大学	打席数(回)	打数(本)	安打(本)	チーム打率	得点
春季 4勝1敗	● N大	24	23	3	130	0
	○ W大	24	19	5	263	2
	○ K大	31	24	9	375	8
	○ NJ大	32	28	10	357	8
	○ M大	26	25	10	400	12
秋季 3勝2敗	● N大	25	20	2	100	1
	● W大	34	25	3	120	2
	○ K大	32	22	10	455	8
	○ NJ大	27	19	6	316	9
	○ G大	28	25	9	360	5
春季 小計		137	119	37	311	30
秋季 小計		146	111	30	270	25
春季・秋季 合計		283	230	67	291	55

2. カウント別の打率と打撃内容

カウント別の打撃内容を、表2(春季リーグ戦)及び表3(秋季リーグ戦)に示した。春季リーグ戦では、初球のカウント【0-0】からは、見逃しが137打席中90回と7割弱を示した。初球からのトライ数は47回で、そのうち安打が23本、そして打率は348と比較的高打率であった。秋季リーグ戦での【0-0】からの打席は、146打席中見逃しが8割弱の115回と多く、初球からスイングしていない傾向にあった。そして、打率は278と、春季リーグ戦を下回る結果となった。しかし、総じて比較的高打率が出やすいカウントであるといえる。

カウント【1-0】の打撃内容は、春季リーグ戦では59打席のうち見逃しが40回と、初球同様7割弱を

示した。そして、打数は4本、安打は0本であった。投手は初球に、ストライクかボールぎりぎりの「打ち捕れる球」を選択することが多く、その球がボールであればカウントが【1-0】になる。投手は【1-0】からさらにボールが先行することを避けたく、緩球が得意でなければ直球を多投する。したがって、この【1-0】のカウントで積極的にスイングしていくことが、出塁機会を増すものと考えられる。一方、秋季リーグ戦の【1-0】では春季同様7割弱の見逃しを示したものの、打率444と高打率を残しており、春季リーグ戦と比較すると、このカウントでの「好球必打」が出来ていたのではないかと考えられる。

カウント【1-1】の、いわゆる「並行カウント」では、春季リーグ戦でのトライ数は58打席中26回と約5割

表2 春季リーグ戦のカウント別の打撃内容

カウント(B-S)	打席数(回)	見逃し(回)	トライ数(回)	打数(本)	安打(本)	打率
(0-0)	137	90	47	23	8	348
(1-0)	59	40	19	4	0	0
(0-1)	53	38	15	8	2	250
(1-1)	58	32	26	18	9	500
(2-0)	26	12	9	4	3	750
(0-2)	18	10	8	5	0	0
(2-1)	37	20	17	12	6	500
(1-2)	29	12	17	7	1	143
(3-0)	9	8	1	0	0	0
(3-1)	22	8	14	6	2	333
(2-2)	29	6	23	16	3	188
(3-2)	22	3	19	12	3	250

表3 秋季リーグ戦のカウント別の打撃内容

カウント(B-S)	打席数(回)	見逃し(回)	トライ数(回)	打数(本)	安打(本)	打率
(0-0)	146	115	31	18	5	278
(1-0)	62	45	17	9	4	444
(0-1)	62	41	21	11	4	364
(1-1)	56	26	30	13	3	231
(2-0)	26	15	7	3	0	0
(0-2)	25	17	8	4	2	500
(2-1)	31	12	19	11	3	273
(1-2)	48	21	27	17	2	118
(3-0)	8	6	2	1	1	100
(3-1)	19	8	11	4	1	250
(2-2)	38	6	32	20	5	250
(3-2)	13	8	5	5	0	0

であり、18打数9安打の高い打率(500)を示した。秋季リーグ戦においても、トライ数は56打席中30回と約5割であったが、打率は231と低かった。【1-1】では、次のストライクを見逃せば【1-2】と追い込まれる。【1-1】から分岐する【2-1】と【1-2】の打率は、春季リーグ戦が555と143、秋季リーグ戦が273と118であり、やはりストライク先行では圧倒的に投手が有利であった。このため、打者は【1-1】からのストライクは積極的にスイングしているのだと考えられる。カウント【0-2】・【1-2】・【2-2】と、打者が追い込まれたカウントでの打率は、春季リーグ戦(000・143・188)と秋季リーグ戦(500・118・250)とも、全体に低い傾向にあった。打者は追い込まれる前に積極的に攻めること重要である。そして、この【1-1】からの打撃がチーム打率向上にとっても重要であると筆者は考える。なお、ソフトボールの投球では、野球と違い肩や肘の局所疲労は少なく、2試合連続登板などしない限り、試合終盤に球速が落ちることがないことから、一般的に球数を多く投げさせるような戦術はとられない。

カウント【3-0】の打席は春季リーグ戦で9打席、秋季リーグ戦で8打席の計17打席あったが、そのうち約8割の14回が見逃しであった。この要因に、打者が四球での出塁を狙っていることと、【3-0】から凡打は「自分勝手」とチームメイトから非難されることもあることが挙げられる。しかし野球の場合は、最も高打率になるカウントは【3-0】であると述べられている⁴⁾。アメリカ・メジャーリーグでは【3-0】からの打撃が推奨されており、逆に大量点で勝っているチームが【3-0】から打つとブーイングが起こる。それほど安打が出やすいカウントでもあるため、ソフトボールにおいても長打力のある打者ならば積極的にスイングしていくのも良いと考える。また監督は、打者の能力を見極め、打つべきか見逃すべきかを判断し、サインを送ることも必要であろう。

野球の専門書には、【1-0】・【2-0】・【2-1】・【3-0】・【3-1】といったボールが先行したカウントは、打者有利と述べられている⁴⁾。ボール先行カウントとすることは、相手投手との兼ね合いもあり、難しい。しかし、投手がストライクを投げづらい状況にす

ることは可能である。それにはまず、ボール・ストライクをしっかりと見極める選球眼と、ストライクを正確に打ち返す打撃技術を身につけることである。ストライクを正確に打ち返すことが出来れば、すなわち安打が増えれば、投手は打たれぬようコーナーぎりぎりを攻めざるを得ない。結果としてボールカウントが増えるのである。なお、上記カウントでの打率は、打数が少なく参考にできない部分もあるが、春季リーグ戦(000・750・500・000・333)と秋季リーグ戦(444・000・273・1000・250)でばらつきがあった。投手がストライク優先で投じた、いわゆる「甘い球」を、正確に打ち返すだけの打撃技術がチームとしてまだ低いと感じる。

IV. まとめ

本研究では、ソフトボールにおけるボールカウント別の打率、打撃内容に着目し、打者有利なカウントや戦術上の問題点を明らかにすることを目的とした。結果は以下の通りである。

- ①カウント【0-0】において、打率は春季リーグ戦348秋季リーグ戦278と、比較的安打が出やすいカウントであった。
- ②カウント【1-1】から分岐する【2-1】と【1-2】では、ストライク先行の【1-2】での打率が明らかに低いため、【1-1】からの打撃がとて重要である。
- ③カウント【0-2】・【1-2】・【2-2】と、打者が追い込まれたカウントの打率は総じて低いため、打者は追い込まれる前の積極的な攻めが重要である。
- ④カウント【3-0】は、四球を狙った作戦もあるが、長打力のある打者では積極的にスイングしていくのも良い戦術となる。
- ⑤打者は、ボール・ストライクをしっかりと見極める選球眼と、ストライクを正確に捉える打撃技術を身につけることが重要である。

なお本研究は、平成23年度の春季リーグ戦・秋

季リーグ戦の2大会を対象とした、自チームのみの調査であった。打席数が少なく十分なデータがとれなかっただけでなく、カウント別の打率のみで検証したため、結果や考察が偏ったものになっている可能性も否定できない。今後は、より多くの大会でデータを収集し、今回調査出来なかったランナーの位置やアウトカウントなど犠打や進塁打を打つ可能性のあった打席の区別などを含め、研究を深めていくことが必要と考える。

引用・参考文献

- 1) H. デーブラー著、稲垣安二・上平雅史監修、谷釜了正訳 (1985) : 球技運動学 pp. 41-42.
- 2) 財団法人日本ソフトボール協会 (1998) : ソフトボール指導教本 (地域スポーツ指導者用) pp. 87-88.
- 3) 鳥越規央 (2011) : 9回裏無死1塁でバントはするな—野球解説はウソだらけ p. 3.
- 4) アメリカ野球指導者協会著、ジャック・スターリングス、ボブ・ベネット編、平野裕一訳 (2011) : 野球 勝つための戦術・戦略 pp. 29-30. p. 73.